

# 上方落語に見られる謙譲語表現の語用論的分析

角 岡 賢 一

## ▶ キーワード

上方落語 待遇表現 謙譲語  
言い換え 付け足し

## ▼ 要 旨

In this paper, a pragmatic analysis of honorific locutions expressing the speaker's humility will be shown citing the examples from the Kamigata Rakugo stories. Such honorific locutions cover the syntactic categories of pronouns, nouns, main verbs and auxiliary verbs. Compared with honorific expressions respecting the person one is speaking to, the syntactic categories and the number of the lexical items are limited. This may be because such formal situations in which modest locutions are used are fewer than the conversations between friends.

## 第一節 はじめに

この小論では、日本語待遇表現という見地から上方落語に見られる謙譲語表現について論じる。謙譲語は、尊敬語に比べても統語範疇が限られると共に実例が少ない。特に、題材を古典落語に求めるとなると場面が商家やお裁きの場などに限定されるので、どうしても例が限られる。卑罵語は、長屋の住人などが対等の立場で丁々発止と言葉を交わすので、実例が豊富である。しかし当主や番頭と使用人が言葉を交わすとなると、自ずから上下関係が介在して畏まる言い方になる。言い換えると、謙譲語を使う場面には前提となる状況が必要なのである。例えば噺『はてなの茶碗』では、油屋が持ち込んだ安物の清水焼に番頭が応対をするが、これが状況である（『米朝全集』第六巻、以下を参照）。それが「えらい、せっかくどしたけど、手前どもでは、ちょっと目エが届きかねます」という応対になって言語化するのである。そういう場面においても、奉公人としての立場で当主や番頭に敬語を使うことは多いが、自分のことに関わって謙譲語を用いる場合は相対的に少なくなることが想定される。

謙譲語で、語用論的かつ統語論的な特徴を一つ挙げる。それは、謙譲語専用の動詞、例えば

「畏まる」は必ず丁寧語の「ます」などと組み合わせて実例になっているという点である。最も形式張った言い方では「畏まりましてございます」となる。敬意を払うべき相手を目の前にするのが謙譲語を使う状況なのであるから、「です、ます」というような丁寧語によって節全体の形を整えることは必須である。

二重謙譲語についても検証が必要である。例えば「拝見（する）」そのものが謙譲語の語彙項目である。ところが噺『はてなの茶碗』では、茶道具屋の金兵衛さんも番頭も「拝見をいたします」と動詞「いたす」を重ねている（『米朝全集』第六卷）。二重謙譲語については当該項目中で論じる。

以下、本章で挙げる実例には例えば「伺う、お目に掛かる」など典型的・代表的な謙譲語の語彙項目は挙がっていない。これは上方噺に題材を限定したために、これら語彙が出現しないという事情によるものである。例えば噺『冬の遊び』では、幫間の一八は堂島の直（相場師）とすれ違い、「はあ、はあー吉田屋はん、わかりました。あとで寄せてもらいまっさかい」と挨拶する（『米朝全集』第七卷）。「伺う」の代わりに「寄せてもらう」と言っているのである。「伺う」は謙譲語であるが、「寄せて+もらう」となると複合形式によって「お邪魔する」という意図を表明しているが、語彙的な謙譲語であるとは言えない。

## 第二節 謙譲語の語彙項目

本節は、日本語待遇表現としての謙譲語実例を統語範疇別に挙げる。まずは人称代名詞から始める。「わたくし」のように汎用的と言える部類から、「それがし、やつがれ」とほぼ武士に限られるような部類まで、多様であるのが特徴の一つである。

### 「わたくし、わたし」

代表的な謙譲語の自称詞と言えるであろう「わたくし、わたし」を採り上げる。『米朝全集』を始めとして、噺の口演筆記には「私」と漢字一字で表記してある例は非常に多い。これは全て「わたし」と発音されているのであって、男女の性や身分や職業において汎用的である。つまり、誰でも自称を「わたし」とすることが可能なのである。それを「わたくし」と丁寧にするのは、それなりの状況が前提となる必要がある。それだけに、実例はごく限られる。噺『三枚起請』で、小輝が書いた起請文に「わたくしことねんあけさふらへば、あなたさまとふうふになりさふらうことじつしやうなり」とあった（『米朝全集』第三卷）。起請文という非常に形式的な文面であるので、自称は「わたくし」である必然性がある。二人称代名詞は「あなた様」と、これも最大限の尊敬度である。一人称と二人称とで、丁寧度を揃える必要もあるであろう。

次に話し言葉の例である。噺『宿屋仇』で、後に明石藩の万事世話九郎と名乗る侍が投宿の折に宿の者に心付けとして銀一朱を渡す（『米朝全集』第七卷）。受け取った伊八は「わたくしへのお心付けでございますかいな、こないにたくさんにぎょうさん、ありがとうございますにござります」と礼を述べる。銀一朱というと、現代では数千円相当と考えられるが、特別に自分だけに心付けを貰ったという状況、また相手が武士であるから「わたくし」という言葉遣いとして具現したと考えられる。「たくさんにぎょうさん」という重ね言葉も、畏まっている態度と心付けを貰って嬉しいという心理の反映であろうか。

次も話し言葉の例であるが、口上という特殊な状況である。噺『猫の忠信』最終場面、常吉に化けていた猫が正体を顕して口上を述べる（『米朝全集』第六卷）。その中ほど、「その時はまだ子猫の私、父恋し母恋し、ゴロニャンニャンと鳴くばかり」、結びは「あれあれあれ、壁に架かりしあの三味の、表革は父の革、裏革は母の革、私は、あの三味線の子でございます」。芝居がかった場面で、狐言葉という特徴ある調子である。ここでの自称は「わたくし」でなければならない。口上で述べられた内容や調子と釣り合わなくなるからである。

講釈ネタであろうが、『雁風呂』では水戸黄門ご老公が登場する（『米朝全集』第二卷）。格さんが「ご両所もおわかりにならぬものが、私にわかるはずがございません」の「私」に「わたくし」と振り仮名が振ってある。ご両所とはご老公と助さんである。

『米朝全集』を含めて、口演筆記では「私」という漢字表記で「わたし」という読みになる場合が圧倒的に多い。「わたくし」ほど丁寧ではない分、使用頻度が高いのである。噺『一文笛』で、掬摸の秀が街中で男に声を掛ける（『米朝全集』第一卷）。茶店に請じ入れて「実は、私は大坂のスリでおまんね、掬摸で……」と打ち明ける。「ちほ」というのは中国語から出た音読みである。ここは「わたくし」というのでは丁寧すぎる。「わたし」でないと奇妙である。

複数形で「わたしども」となるのは、珍しい噺『三年酒』で見られる（『米朝全集』第四卷）。マクラとも言える部分で、神道講釈の義竜先生に弟子入り志願をしようと偽装した僧侶達が「、、私どもは、なるほど日本は神国。日本という国に生まれながら仏教を信じて、頭を丸めたというのは恥ずかしいという気になってきたんで」などと嘘八百を並べる。実際の口演を聴いて確かめたが、「わたしども」という複数形であった。「わたくし」と改まっても良さそうな場面であったが、「わたし」であった。

### 「手前、手前ども」

主として商人が、自称を「手前、手前ども」と称する謙譲語がある。「ども」は、本来は複数形を示す接辞であろう。商店は通常、当主以下に何人かの従業員が働いているであろう故、自然に「ども」とも言うようになったものであろう。以下、例を示す。

噺『宿屋仇』では、兵庫の若い衆三人連れが日本橋で紀州屋源助という宿を探す最中に「ありがとうございます。手前どもがその紀州屋で」と答える。三人連れは「われとこか。おい、わかった、このガキや」と言葉が荒い。宿屋側は「手前ども」と謙っているが、客の側である三人連れは「われとこ」と野卑度が高い。

次の例も商家である。噺『胴乱の幸助』で、京は柳馬場押小路、虎石町の西側にあった帯屋の店先で幸助はんとお店の番頭が話をしている（『米朝全集』第五卷）。幸助はんは浄瑠璃『桂川連理柵』の筋書きを真に受けて、帯屋の当主は長右衛門、内儀はお絹と思い込んでいる。番頭は「手前どもの主人は長右衛門とは申しませんのでなあ、えー、太兵衛と申しますで」、「手前どものお内儀はお花と申しますで」と説明する。

噺『米揚げ箆』で、箆の売り子という仕事を世話された男が、天満源蔵町の箆屋重兵衛商店を訪れて、当主の重兵衛が応対する（『米朝全集』第三卷）。「ああ、箆屋重兵衛なら、手前じゃが」という当主に対して男は「あっさやか、拍子の悪い……何軒ほど手前です」。男が「手前」を自称の謙譲語と解せず、地理的に手前か奥かというように無理矢理にこじつけたかのように違う家を訪れたという誤解から生じる笑いである。

侍階級でも「手前」と称する例が見られた。噺『鹿政談』において、奈良の鹿守り役である塚原出雲がお裁き場で、奈良奉行に「おそれながら塚原出雲申し上げます。手前、長年鹿の守役を務めてまいりました」と述べる（『米朝全集』第四卷）。侍身分で「手前」と自称するのは珍しい。上役に相当する奈良奉行に対する謙遜から出た謙讓語であろう。

噺『はてなの茶碗』で茶道具屋の番頭が「えらい、せっかくどしたけど、手前どもでは、ちょっと目エが届きかねます」と清水焼の茶碗を持参した油屋に断った（『米朝全集』第六卷）。「手前ども」というのは、茶道具屋の実務を預かる番頭が店を代表して口にするような言い様である。この言い方は立て前として、「当店では目が届きかねます」と謙遜しているが、本音は「余所さんへ」という方で、体の良い断りである。本音と建て前を使い分けるといえるのは、語用論的な側面としても最も複雑な状況であると言える。

### 「身共」

侍言葉で自称代名詞「身共」を検証する。

噺『能狂言』は伊勢街道古市の宿で博打に負けた喜六清八の二人連れが、お伊勢詣りも控えて途方に暮れるという筋書きになっている（『米朝全集』第六卷）。伊勢道中の噺ではあるが、文我師の伊勢詣り全編には入っていない。土地のお城に養子を迎えたのであるが、能狂言を観たいというので高札を立てて「能狂言、心得ある者は申し出ずべし」。これに飛びついた喜六清八、能狂言の心得などある筈もないが、ままよ、なんとでもなるわいとお城に申し出る。別の噺『軒付け』でも語られる『忠臣蔵』五段目山崎街道を、遂に狂言仕立てにしてしまうのである。「またも降り来る雨の足、人の足音とほとほと、、、」という義太夫を謡い調で誤魔化し、清八が与市兵衛に扮して「これは山崎の片辺に住む与市兵衛と申す者でござる。今日た、娘軽を祇園町に売り、五十両の金を受け取って戻りました」と語り出す。「今日た」という、謡い調を真似した語りである。喜六は斧定九郎として登場し、「のうのう、それなる親爺、やっ、待たしゃれ」。清八「身共のことでござるか」。与市兵衛は原話『忠臣蔵』では百姓であるが、ここは狂言の登場人物として侍言葉のような「身共」を名乗っている。この自称について、『日本国語大辞典』から引用する。

- (1) (自称代名詞の「み(身)」に接尾語「ども」が付いたもの。「ども」が付いても単数として使われる) 自称。目下に対する尊大な言い方「身(み)」に比べ、同輩または目下の者に対してあらたまった感じで用いる(中略) ④男子が用いる場合。本来武士階級の用語であるが、町人も用いた。(以下略)

まず注目すべきは「尊大な言い方」という語釈である。これは自称代名詞「身」についての説明であるが、『日本国語大辞典』では「自称。中世、近世において、男子がやや優越感をもって、自分をさしている語」とある。『日本国語大辞典』には「尊大語」という見出しそのものはないが、この項で尊大語に言及されているというのは注目に値する。「身」という自称語は落語中に少ない。文語的であるからであろう。元に戻って、『能狂言』という噺は忠臣蔵ネタでありながら、これを狂言仕立てにするという点で複層構造になっている。「身共」という自称にも、それが反映されている。狂言仕立てになるからこそ、清八扮する与市兵衛が「身共」と名乗っ

たりするものであろう。劇中劇である故に参考程度に留めておくべきであろうが、貴重な場面である。

次は噺『住吉駕籠』からであるが、これも侍である（『米朝全集』第四卷）。お姫様の乗った駕籠が通らなかったか尋ねて、「身共あれなる茶店でやすらいおるゆえ、お通りがあらば知らしくれるよう、頼んだぞ」と言い捨てて立ち去る。駕籠屋は「……なんかしやがねん。誰がそんなものの番してるかい」と立腹である。もう一例は小咄『試し斬り』からである（『米朝全集』第五卷）。二人の侍が、刀について話し合っている。一人が「実は身共も先般、新刀を買求めましてな」と切り出す。典型的な侍言葉である。

### 「拙者」

謙遜語の語彙は、人称代名詞でも少ない。加えて京は王城の地、大坂は商人の街であるから、上方落語全般に武士の登場する噺は少ない。「拙者」というのは『日本国語大辞典』によると謙遜語の自称で、「目上に対して多く武士が用いた」。噺『七段目』で、若旦那が親旦那に諭される場面で、劇中劇として『忠臣蔵』三段目から塩谷判官を若旦那が演じている（『米朝全集』第六卷）。「遅なわりしは拙者重々の誤り。御前に出づるも間のあることと、お次に控えおりました」と、上使に対しての敬意表現で「拙者」と自称したものであろう。侍言葉は、武士が町人に対して発する場合は尊大語になる。武士同士であっても、下役に対してはやはり尊大語である。武士同士で目上の者に対する「拙者」のような例だけが謙譲語であると言える。侍同士対面の場面が直接に描かれる例として、噺『矢橋船』から挙げる（『米朝全集』第七卷）。故国で紛失した名刀小烏丸を詮議して諸国を経巡る侍二人、船中で乗り合わせた浪人者の持つ刀に着目して声を掛ける。「もうし、率爾ながら」「拙者でござるか」。片や浪人とは言え、侍同士の会話中である。

### 「愚僧」

日本の語り話芸は仏教の説教に遡る。従って、仏教に題材を採った噺や僧侶が登場する噺も多いのである。『餅屋問答』という噺から例を引く（桂梅団次師の口演筆記）。この噺は江戸噺では『菟蓐問答』である。これが上方に移された際、京阪には丸い菟蓐がなかったので餅屋に置き換えたという（釈師『落語に花咲く仏教』）。「愚僧は越前の国、永平寺学僧、沙弥卓然と申する諸国行脚の雲水出家。当本山ご門前をば通行せし折、あれなる禁牌石に不許葷酒入山門「葷酒山門に入るを許さず」とのこと、まさしく同門の士と心得、問答仕りたく推参」。「愚僧」は僧侶の自称で、謙って言うものである。この後、教義を巡って問答を繰り広げるのであるが、一つ不可解な点がある。ここで僧侶は「越前永平寺の沙弥卓然」と名乗っているが、曹洞宗大本山である永平寺の僧が問答をするというのが不可解である。公案を巡って問答する看話禅というのは臨済である。臨済には永平寺に相当するような名の通った寺がない故か、とも考えるが事情は詳らかでない。

もう一例は、枝雀師による『八五郎坊主』である（『枝雀全集』第三卷）。他に生活の当てもないので出家した八五郎という男、「法春」という法名を貰う。和尚から「それから、言葉遣いにも重々気をつけてな。今までのようなぞんざいな言葉遣いではいけん。何を言われても「ハイハイ、愚僧かな」とな」と答えるようにと諭される。ところが成り立ての僧法春、寺から家

へ戻る折に友達から「おい、八」と呼び止められて、「おう、由に竹、、、」と応じてしまい、「すまんけども一遍呼んでくれ」と頼み込んで、ようやく「はいはい、愚僧かな」と答える始末である。頭を剃って僧侶にはなったものの、言葉はそう簡単に身に付かないものである。

### 「それがし、やつがれ」

自称代名詞の謙譲語として、侍言葉に近い、些か堅苦しい「それがし、やつがれ」を採り上げる。「やつがれ」は噺『くっしゃみ講釈』にしか見られない、やや特殊な言い回しである（『米朝全集』第三卷）。講釈師の後藤一山先生は、知らずに恋路の邪魔をした男が復讐として講談の公演中に目の前で唐辛子を燻べられる。くしゃみを二つ三つした後で「やつがれも転た寝をして風邪を引いたものと相見えす」と言い訳をする。それでもくしゃみが止まらないため、やむを得ず当夜の口演は中止して客に引き取ってもらう。最後に残った二人、ここぞとばかりに講釈師に罵詈雑言を浴びせる。「他のお客さん方は、某の苦しみを見て気の毒がってお帰りくだされたが、お客さん方は私になんぞ故障でもおありか」「いや、胡椒がないから唐辛子燻べたんや」でサゲになる。「やつがれ、それがし」いずれも、文語的で日常用語ではない。噺では、講釈師が席で語っているの、さほど不自然ではない。尤も、この講釈師は普段から「雪駄の裏ににいやりとおいでたは、土にしては粘りけもこれあり、犬糞でなくばよいが、、、」というように小難しい喋り方をするように面白おかしく描かれてはいる。「やつがれ、それがし」にしても、日常用語ではない言葉遣いによって演出効果を高めているのであろう。

侍言葉である「それがし」は、噺『ふたなり』にも見出せる（『米朝全集』第七卷）。演題になっている「ふたなり」とは両性具有を大和言葉にしたものであるが、検死役の郡代官役人が「なるほど、いや、それがし考えますに、古老の方より聞き、また書物にて読んだ覚えがございます。世にふたなりと申す者がござる」（傍点は原著）。

珍しい噺で『関津富』<sup>せきのしん ぶ</sup>、読みも難しいが文化文政の頃に江戸は神田豊島町に住んでいた俳人という設定になっている（桂文我師『続 復活珍品上方落語選集』）。武者修行と偽って空腹を満たそうと考えて長沼四郎左衛門道場門前で「某は、諸国行脚の武者修行でござる」と呼ばれる。身形とは言えば、腰に木刀を一本ぶち込んでいたということにはなっているものの、危ない橋を渡ろうとしたものである。

### 「恐悦」

文語的な堅苦しい響きで「恐悦（至極）」という語は、『日本国語大辞典』で二番目の語義として「目上の人の喜ばしい出来事を、自分も喜ぶというという気持を表わす語」と説明している。速記であろうか、1890年という年代入りで禽語楼小さん師の『殿様の廓通ひ』から「夫は私始め御家中一般の喜悦、恐れながら、御恐悦申上げます」という例が挙がっている<sup>1</sup>。噺『本能寺』で武智光秀（史実の明智光秀）が小田春永（織田信長）に「我が君様の、いつに変わらぬご尊顔を拝し、光秀、恐悦に存じます」と挨拶する（『米朝全集』第七卷）。芝居噺であり、歴史上の登場人物ということもあるが、形式張った台詞である。

1 東大落語会編『落語事典』によると、この噺は別名を『盃の殿様、月の盃』とも謂うようである。

### 「厄介」

「厄介」の原義は他人の世話をすることであるが、居候の意味もある。まずは噺『抜け雀』において、絵師が小田原宿の小松屋清兵衛という宿屋に投宿する際、「酒は上酒を吟味して用意しております」と聞いて「それは結構じゃ。しからば厄介になろう」と言うのは、「世話になろう」の意である（『米朝全集』第六卷）。噺『商売根問』の冒頭で、甚兵衛はんに住処を尋ねられた喜六、「目下のところは十かいの身の上」と答える（『米朝全集』第四卷）。訝しがる甚兵衛はんに「よその二階に厄介になってるさかいね、二階とやっかいで合計、十かい」という珍妙な計算。両例とも、「他人の世話、居候」という原義に忠実である。これは「厄介」という語そのものが謙讓語的な意味を有していると言えるであろうか。

### 「率爾ながら」

『日本国語大辞典』では「率爾」の語義として、形容動詞という分類の下に「物事の起こるのが、突然であること」と説明している。そして「率爾ながら」という別見出しを立てて「人に声を掛け、ものを問う時などに用いる語。突然で失礼なこととは思いうが」と注釈している。日常の場面で用いる語としては、文語的で堅苦しい響きである。噺『矢橋船』で、故国で紛失した名刀小烏丸を詮議して諸国を経巡る侍二人、船中で乗り合わせた浪人者の持つ刀に着目して声を掛ける（『米朝全集』第七卷）。「もうし、率爾ながら」と声を掛ける。浪人は「拙者でござるか」と返す。上述の説明に合致する状況である。侍は更に「かかるところで不躰に声をかけまして、失礼の段は平にお許しを」と言葉を続けている。「率爾ながら」には不躰という語用論的意味合いが含まれていると言える。

もう一例は噺『口入れ屋』から引く（『米朝全集』第三卷）。口入れ屋から周旋されてきた女子衆、番頭が給金の決めと称して長々と喋っていたが、番頭が知らぬ間に御寮人さんが面接している。この女子衆、縫い物と三味線に続けて特技を次々と並べ立てる。「お子たちが夜習いでもあそばすようでございましたら、率爾ながら、お手本ぐらひは書かせていただきます」に始まって、鉄砲の撃ち方、地雷の伏せ方まで並べ上げる。「出過ぎたこととは思いますが、…」という謙遜であろう。

### 「申す」

謙讓語として用いられる動詞で、代表格が「申す」とであると言える。日常会話の場面で、常に誰かが誰かに対して話しかけるのであるから、必然的に「話す」という動詞の尊敬語形や謙讓語形は頻用される必然性が高くなるであろう。補助動詞としての用法もある。

噺『猫の忠信』は『義経千本桜』の狐忠信を趣向取りして、三味線の皮に張られた猫の子が親を慕うて三味線を追い求めるという筋書きになっている。吉野家常吉に化けた猫が正体を現して「申します、申します」と切り出すのをきっかけに、「来序」というハメモノが入る。噺『抜け雀』では、宿の亭主が酒代を請求したのに対して泊まり客の絵師が「ああ、勘定のことを申しておるのか」と応じる。用向きを切り出したのは宿の亭主であるが、絵師は「勘定のことを申しておるのか」と切り返したものである。「申す」という謙讓語でありながら、絵師は宿の亭主に対して高飛車な態度で臨んでいるようである。

「申す」をより丁寧にしたのが「申し上げる」という複合語形である。裸の「申す」よりも、

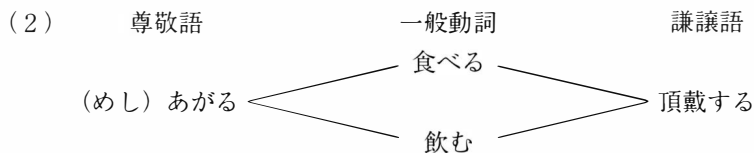
「申し上げる」形の方が使用頻度は多いように思われる。噺『ぬの字鼠』は、懲らしめのために木に括り付けられたお寺の珍念が足下に書いたぬの字鼠によって縄をほどかれるという筋書きである（『米朝全集』第六卷）。お寺の和尚が花屋さんから聴いた話として再現しているところに「私とこはもう何もかも存じておりますさかい、うちはかまいませんが、よそで珍念さんがあんなことを言うて、ひょっと世間に漏れたらえらいことになりますので、これはちょっと申し上げます」。前段に長い前置きがあるが、花屋さんからのご注進である。

配慮表現として、「申し上げます」の類いは随所に見られる。噺『らくだ』では、らくだが住まう長屋に出入りしていた紙屑屋が、脳天の熊五郎というらくだの兄貴分に言いくるめられて家主の元に遣いに出る。「家主と店子は親子も同然の間柄やさかい、そこは遠慮なしに申し上げます」「ふーん、何を申し上げるねん」。家主は鸚鵡返しに「何を申し上げるねん」と訊き返しているが、これは紙屑屋の言い様を真似したものに過ぎない。紙屑屋は、自分が家を借りているわけではないが、家主という立場を尊重して「申し上げます」と謙っているものであろう。この辺りが語用論的観察として面白い。

補助動詞としての例を噺『立ち切れ線香』から挙げる（『米朝全集』第五卷）。紀ノ庄というお茶屋の娘で芸妓として出ていた小糸の元に通り詰める若旦那の処遇について親族会議が開かれていた。番頭の提唱により、乞食<sup>2</sup>にさせると衆議一決した。それで番頭が「こっちは乞食におさせ申したい、そっちはしてみい……こら願うたり叶うたりという話で……。乞食になっておもらい申します」と宣告する。「おさせ申す、なっておもらい申す」と他では見られないような謙譲表現である。

## 「よばれる、頂戴する、頂く」

本動詞「食べる、飲む」の謙譲表現が「よばれる、頂戴する、頂く」である。敬語体系が複雑である側面の一つに、「食べる」と「飲む」という全く異なる動作に対して、それぞれ「あがる、召し上がる」と「頂戴する」という言い換えが対応している点がある。図示してみると、次のようである。



「飲食する」というのは生活する上で最も基本的な動作であり、人間関係上も相手に飲食を勧めるというような場面は頻繁であろうと想定される。それ故に尊敬語と謙譲語共に言い換え表現が発達したと考えられる。「食べる、飲む」両方を指して「飲食する」と言える漢語は、こういう場合に便利である。漢字一字、一音節で動作を表すことと、組み合わせが自由であること。日本語は「飲み食いする」というようにしか言えない。

2 現代の人権意識からは、この語そのものが不適切であるが、言い換えなどができないので、原著のまま表記する。

例を挙げる。『七度狐』で、狐の幻術によって尼寺に迷い込んだ二人連れが雑炊を馳走に与る場面、清八が「へえ遠慮なしによべれます」と応じている（筑摩書房版米朝全集第二集）。尊敬語の「おあがりになる、召し上がる」と対になっているのは、尼寺の庵主さんが「よかつたらおあがりを」と勧めているのと対になっているのである。清八は「さあさあ、ほなちょうだい致します」と続けるが、「頂戴する」だけでも謙譲表現であるところに加えて「致します」と補助動詞を足している。謙譲語にも「頂戴いたします」というような重ね表現があるという例になりそうである。出汁を取るためにいもりを入れたと聞いた清八、「もう十分に頂きましたでございます」とお代わりを丁重に辞退する。噺『京の茶漬け』では、京の家で茶漬けをご馳走になる場面で「えらいすんまへんなあ、こちらさんでご飯までいただくやなんて厚かましい（中略）いや、ありようはちょっとお腹が減つとりましたんでな、ほな遠慮なしに頂戴いたします」（『米朝全集』第二巻）。「いただく、頂戴いたします」と謙譲語が二種類、後者は言い換えと継ぎ足しの二重である。噺『軒茶屋』では、お茶屋の姐貴から「おぶ（お茶）をどうぞ」と勧められた客のターさん、「ああ、よべよう」と応じる（『米朝全集』第一巻）。

#### 「差し上げる」

一般の謙譲語語彙としてはごくありきたりであると思われる「差し上げる」は、噺では多く見られない。これは偏に、誰かに何かを進呈するというような場面が珍しい故であろうと考えられる。噺『くっしやみ講釈』では、目前で唐辛子を燻べられてくしゃみで講談を語ることができないようになって、講釈師の後藤一山先生は「お客さん、これではとても講釈はでけん、半札とは思いますが、丸札を差し上げますゆえ、どうぞ、今晚のところは、お帰りを」と謝る（『米朝全集』第二巻）。半札というのは次回来る折の半額割引券、丸札は無料券である。今晚は講釈続行が不可能であるから、口演中止という訳である。

#### 「まいる」

漢字で書けば「参る」で「参じる」と意味も近いということが類推される。本動詞と補助動詞両方に用いられ、謙遜に近い意味を表す。本動詞としては、噺『べかこ』（『米朝全集』第七巻）で噺家泥丹坊堅丸を連れて城中を案内する菅沼軍十郎という侍が、「次へまいる。これが松の間じゃ」「こちらへまいろう。これが休息の間である」と城中を巡る。この「参る」は「行く」という意の本動詞である。

噺『抜け雀』の主人公は絵師であるが、宿屋の亭主相手に話すのは侍言葉に近い（『米朝全集』第六巻）。投宿早々、風呂は沸いているか尋ねて、沸いているとの返事に「ふむ。旅のはこりを流してまいる」。中立的な言い様ならば「流してくる」となるであろうが、尊大語の響きも感じられる重々しい言葉遣いである。噺『地獄八景亡者戯』では、四人の亡者が針地獄に落とされた折りに軽業師の和屋竹の野良一が他の三人を肩の上に載せて針の山に登る（『米朝全集』第四巻）。その口上「これより四人の亡者、針の山へと登ってまいる」をきっかけに、「綴」というハメモノが入る。この例も、口上という堅苦しい場面での言葉遣いである。

#### 「承る」

これもまた謙譲語動詞の代表格と言えるであろうが、「聞く」の謙譲表現が「承る」となる。

噺『宿屋仇』で、投宿する折に泊まり客の侍が「泊まりの節、そのほうに身共明石の藩中にて、万事世話九郎と申したの」、応対した宿の手代伊八は「へえ、そのように承りました」（『米朝全集』第七巻）。伊八の応対は「そのように伺いました」とも言い換えられそうである。

噺『辻八卦』では、他人の見立てを後ろから聴いていた侍が大仰に「いや、さいぜんより人ごみの後ろにて承っておりましたが、いちいち的確なご判断、ことごとく感服仕りました」と切り出す（『米朝全集』第五巻）。「聴く」というのを「承る」と謙譲語にしているが、これが大仰に聞こえる。

次は定型句的に、悔やみの中で使われる例である。噺『向う付け』で、十一屋というお店のご隠居が亡くなり、葬礼に弔問に来た美濃屋の女子衆が「承りますれば、こちらの御隠居様には、ついにはようございませなんだそうで」と悔やみを言う（『米朝全集』第七巻）。このような場面では言う内容や言い方は固定されているような状況であろうが、「ようございませなんだそうで」にしても、行き届いた言い様である。続いて弔問に訪れた喜六も同じように「えらい遅なって。どうもすみへん。……承りますればこのたびは」と悔やみを言いかけるが、帳場に座っている者は喜六が口下手であることを先刻承知である。

逆に、普段は口が悪いのに故意に丁寧な物言いにして脅かそうというような意図の場面もある。噺『らくだ』では脳天の熊五郎という兄貴分が、らくだの葬式を出したいがために家主に無理難題を押しつける（『米朝全集』第七巻）。長屋に出入りしていた紙屑屋しぶとを伴い、らくだの骸を背負わせて家主宅に赴いて「承りますれば、こちらでは死人のかんかん踊りがご所望なそうな」。これは言葉遣いは謙っているが、内実は脅しにかかって通夜の酒と煮染めをせしめようという魂胆であった。熊五郎は乱暴者で、紙屑屋に対する言葉遣いは卑罵語の極みとも言えるほどの荒っぽさであった。それが一転して「承りますれば」と謙譲語になっているのは、家主に対する意趣遺恨を晴らそうとする意図である。

## 「畏まる」

自分が行う動作について「謹んで承りました」という意を表す謙譲語が「畏まる」である。必ず聞き手を前にして口にするという前提があるので、「畏まりました」と丁寧語形になる。噺『稻荷俤』のマクラで、神さんのお遣わしという話題が登場する（『米朝全集』第一巻）。毘沙門天のお使わしは百足で、毘沙門天が「この手紙を弁天さんのところへ至急に持って行てくれ」と頼まれた百足、「かしこまりました」と返事する。自分がお遣わしとして仕える毘沙門様への返事であるから、丁寧である必要がある。噺『べかこ』で、肥前は武雄の地で、姫の御前で噺をするように命じられた泥丹坊堅丸師匠、「上品でかつくだけた内容の噺をするように」という難しい注文を付けられて「畏まりました」。また、噺『植木屋娘』では、植木屋の幸右衛門から書き出し（請求書）を頼まれた寺の和尚が、伝吉に代わりを申しつけたところを「かしこまりましてございます」と伝吉が受ける（『米朝全集』第一巻）。「畏まりました」と「ございます」を重ねて、極めて丁寧な応答である。同様に「かしこまりましてございます」と受けているのが、噺『宿屋仇』で日本橋の宿屋紀州屋源助宅において明石藩の万事世話九郎と名乗る侍に対応した手代の伊八である。

### 「控える」

「待つ」という意味に限定して「控える」というのが謙譲語的用法である。一般的に「差し控える」の意味で「控える」と言えば動作全般を対象とするようになるが、それでは謙譲語と言えない。事例は『七段目』、これ自体が『忠臣蔵』七段目から取った噺であるが、前段で若旦那が芝居に熱中する余りに親旦那から小言を言われる場面である（『米朝全集』第六卷）。「遅なわりしは拙者重々の誤り。御前に出づるも間のあることと、お次に控えおりました」、判官が上使を待って次の間で待っていたというのである。

お裁きの場面では、奉行が「控えい」とお白洲の人物を制する場合が多い。この場合は命令形であるが、元になっているのは謙譲語としての動詞「控える」である。噺『鹿政談』では、奈良奉行曲淵甲斐守が豆腐屋六兵衛さんを尋問する際、初めは「ああ待て」と制したが次には「控えい」と変わった。ここでも「控える」が「待つ」という意の謙譲語であることが自明である。

お裁き以外で、武士が「控えい」と制止する場面がある。噺『べかこ』で、噺家泥丹坊堅丸が腰元に悪さをして城中で追いかけて回される折に「城中を騒がす不届き者、それへ控えい」と制されている。その直前には「さあ直れ。それへ直れ」と、やはり行動に制限を受けるような命令をされていた。

### 「まかり出る」

複合語的語構成であるが、「まかり出る」を採り上げる。『日本国語大辞典』では「まかりいず」という見出しの下で「（「まかり」が自己側の動作をへりくだる意のもの）かしこまった気持ちでの対話や消息に用い、自己側の者の「出る」動作を、聞き手に対しへりくだる気持ちをこめて丁寧という。出てまいります。（御免をこうむって）出ます」という説明がある。噺『テレスコ』で、漁師の仁助が「はい、これも親父に聞いておりました魚のように思いますので、まかり出ましてございます」と二度目の懸賞金を狙う（『米朝全集』第五卷）。

### 「(行て) 参じます」

「参じる」というのは、『大阪ことば事典』291頁での説明によると「限られた動詞に付いて、ていねいな意味になる」とし、例として「行てサンジます、見てサンジます」と挙げられている。

これが、本動詞となる例がある。『書いたもんがもの言うた』という小咄で、本編『五光』のマクラとして振られている（『米朝全集』第三卷）。丁稚が毎晩、夜中にお手水に立つのに目を覚ます。古い人が呪いとして、「お前な、今夜、夜中に便所へ行ったら、下を向いて『明晩からよう参じまへん』と、こない言うのや」と教えてくれる。ここで「参じる」が「行く」の謙譲語として使われているが、古風な響きがする。「明晩」という言い方もまた古風である。呪いとして有り難みを出すための言葉遣いであろうか。もう一例は小咄『向かいのお婆さん、お茶飲みにごんせ』で、サゲに「糊が強うて、よう参じまへん」と単式否定で見られた。

このように古風な本動詞「参じる」を除けば、「参じます」は他の動詞に接続して複合形を形成する。噺『植木屋娘』では、お寺の伝吉つつあんが和尚に言いつけられて幸右衛門の書き出し（請求書）を書きに出かける折り、「心得ております。ほな、ちょっと行って参じますで」と言い残す。用向きに出かける折りの定型挨拶のようなものである。丁寧な気持ちを込めるとい

うのが、謙讓語として認められるであろう。現代の標準的な日本語に言い換えれば、「行って参ります」が相当するであろう。「いて」-「いって」、「参じます」-「参ります」という二つの対応がある。現代の標準的な日本語に促音便がある「いって」に対して、船場言葉では促音便はない。「まいります」と訓読みのであるのに対して、船場言葉は「さんじます」と音読みのである。

噺『百年目』で、番頭を呼んでくるように言いつけられた丁稚が「へい、行て参じました」と報告する場面がある（『米朝全集』第六卷）。ここでは過去形になっている。

この「行て参じます」と対になっているのが「お早うお帰リ」という見送りの挨拶である。『船場大阪を語りつく』という聞書の中で、大正四年生まれの宇佐見辰一氏が「いてさんじます、おはようおかえり」という題で往時の船場を語っておられる。噺『百年目』では、お店一統に小言を垂れてから「お得意先を回ってきます」と出かける番頭を「どうぞお早うお帰リ」と店の者が見送る（『米朝全集』第六卷）。田辺女史『大阪弁おもしろ草子』では、「行てさんじます」という挨拶に対して、見送る側が「行っといないは」と返す例が紹介されている。

### 「仕る」

他の動詞と接続して謙讓語を形成するという点では「仕る」は「参る」と同様である。『日本国語大辞典』では「つこうまつる」という見出しの下で次のような説明がある。「（「つかえまつる（仕奉）」の変化したもの）「つかえる（仕）」の謙讓語で、仕る対象を敬う（以下、略）。小咄『紀州』で、次の將軍を決める評定の様子が語られる（『米朝全集』第八卷）。順番として尾張大納言が先に「身不肖にして、その任にあらず」と辞退する。この「身」というのは尊大語である。次に紀州大納言が「身不肖にして、その任にあらず……といえども、下万民のためとあらば、承引仕る」と受けてしまう。ここに尾張大納言の誤算があった。最初の計らいで受けてしまったのは厚かましいかと思われるなど配慮の末に、一度は断った。断れば、続いてもう一度計らいがあるものと思慮していたのであろう。ところが、すぐに紀州大納言に計らいが振られて、それを受けてしまう。これが誤算であった。

噺『辻八卦』では、見立てを後ろから聴いていた侍が大仰に「いや、さいぜんより人ごみの後ろにて承っておりますが、いちいち的確なご判断、ことごとく感服仕りました」と切り出す（同第五卷）。この噺は小咄の寄せ集めのようなもので、このように大仰な言葉遣いをするような内容ではないのであるが、全体に『仮名手本忠臣蔵』の趣向取りになっている。

噺『らくだ』で、らくだの兄貴分熊五郎が偶々入ってきた紙屑屋を使い仕立てて、家主の許に伝言をさせる（同第七卷）。その口上に「長屋のらくだが死去仕りました」と丁寧に言わせるのであるが、この熊五郎自身は乱暴者で本来はこういう形式張った言葉遣いをする人物とは描写されていない。この口上によって、上酒三升と煮染め三杯を届けさせようという魂胆があったからである。

もう一例は噺『軒付け』で語られる浄瑠璃『鎌倉三代記』、三浦之助戻りの段である（『米朝全集』第六卷）。素人浄瑠璃の連中が近所で軒を借りて義太夫節の稽古をするのであるが、ある一軒で「先立つ涙、案内にて「物音響かば驚きたまわん、静かに、静かに」と、心鎮めて病所のくち、立ち寄れば母の声、嫁女嫁女、お嬉しや、お目がさめましたか、三浦様のお帰りでや。義村参上ー……つかまーつーー」と、最後に大声を張り上げる。途端に家の中から

「じゃかましいわい」と返ってくる。通常の口語会話文ではなく、人形浄瑠璃で語られる床本における言葉遣いであるという点には留意が必要である。しかしながら、「仕る」という謙譲語の実例として貴重である。

### 「心得る」

奉公人など、誰かに仕える立場で気働きをすることを指して、主として自分の行動について述べる場面での謙譲語と定義する。晰『禍は下』で、夜遅くに旦那さんのお供で出かけた丁稚の定吉、旦那さんはお泊まりで自分一人だけ店に帰ることになった（『米朝全集』第七卷）。その言い訳で「あんじょ言うねんで」と因果を含められて「心得とります」と請け合う。謙譲表現でない言い方に戻すとすれば、「わかっとります」というほどであろうか。謙譲語も細かく分析していくと、前提としての状況がこのように徐々に複雑になってくる。

### 「恐れ入る」

語源的には怖がるの意であろうが、「恐縮する」という気持ちを形式的に表すようになったものであろう。晰『除夜の雪』で、伏見屋の御寮人さんが夜中近くに借りていた提灯を返しに来る。鐘を撞こうと待機していた三人は「ちょっと丁稚さんにでもことづけてもろたらよろしかったですのに、まあ、お使い柄恐れ入ります」と礼を述べる（『米朝全集』第四卷）。

### 「拝見する、拝察する」

漢語系語彙も、謙譲語になる。「拝見」であれば形式名詞と分類できるであろうが、「拝見する」として動詞に扱う。晰『はてなの茶碗』で、清水の茶店で不思議な茶碗を見つけた油屋が、茶道具屋の金兵衛さん店にその茶碗を持ち込む（『米朝全集』第六卷）。油屋は直接茶金さんに鑑定してもらいたいのであるが、番頭が「どのようなお品でも、一応、店を預かる番頭の私が拝見をいたしまして、目エの届きません節に、また主のほうへ」。ここで「拝見をいたします」と、二重謙譲語の様相を呈している（本章第一節）。後に鑑定した茶金さんも「ああ、茶碗どすかいな……拝見をいたします」と全く同じ言い様である。単式叙述で「拝見します」とするのが正用であろうが、謙ろうという意識が過剰になったがために「いたします」を足したものであろう。

「拝察する」という語も、漢語系の「拝察」に「する」を加えて動詞にするという語構成などが「拝見する」と同様であり、ここで扱うこととする。晰『矢橋船』では侍同士の対話で次のような場面がある（『米朝全集』第七卷）。「ご貴殿のお腰のもの、拵えといい反りと申し、柄頭から鰐にいたるまで、実にお見事なる逸品と拝察いたす」。「拝察」に「いたす」を連ねているので、これも二重謙譲語と考えられる。

### 「御免なされてくださりませ」

商人の言葉遣いであるが、特にお武家に出入りするような際の格別な丁寧さであろう。晰『宿屋仇』で兵庫の若い衆源兵衛が小間物屋として高槻藩中を行商して歩く（『米朝全集』第七卷）。重役の小柳彦九郎宅に入る折、「御免なされてくださりませ」という挨拶をする。謙譲語の「御免」、尊敬語の「なされて、くださる」という組み合わせで全体として非常に丁寧な挨拶になっ

ている。

### 「忝う存じます」

形式的な表現で、固定化された言い方である。「忝い」そのものも古風で文語的な響きであるが、それに「存じます」と続くと、より形式的になる。『日本国語大辞典』では、「かたじけない」全体で「高貴なものに対して下賤なことを恐れ屈する気持ちを表す」という括弧書きがあり、三番目の語義として「分に過ぎた恩恵や好意、親切を受けて、ありがたううれしい。もったいない」と説明がある。噺『本能寺』で武智光秀（史実の明智光秀）が小田春永（織田信長）に「何とぞ中国討手の人数に御加えくださりようならば、かたじけのう存じまする」と懇願する（『米朝全集』第七卷）。芝居噺であり、歴史上の登場人物ということもあって、形式張った台詞である。

### 「存ずる」

噺『ふたなり』で、変死事件を扱う代官所の役人二人、「ご同役、お役目ご苦労に存ずる」「いや、お互いにお役目ご苦労でござる」。「存ずる」は「思う」の謙譲語であるが、侍言葉に典型的な古風で形式的な響きである（『米朝全集』第七卷）。『日本国語大辞典』には「多く、聞き手に対して、あらたまった気持ちをこめていうのに用いる謙譲語」という説明がある。もう一例は芝居がかった場面で、噺『掛け取り』から引く（『米朝全集』第二卷）。この噺は大晦日に掛け取りに来るのを、その人の好きな物で断ろうという趣向になっている。芝居好きの醤油屋を上使と見立て、「これは、これは、お掛け取り様には、遠路ご足労に存じます」「お掛け取り様には、今日の上使の趣、仰せ聞かしくござりようならば、ありがとう存じまする」と芝居口調である。上掲の噺『本能寺』で武智光秀（史実の明智光秀）が小田春永（織田信長）に「我が君様の、いつに変わらぬご尊顔を拝し、光秀、恐悦に存じまする」とご機嫌を伺う。形式張った挨拶である。

## 第三節 謙譲語の纏め

ここで、本章で検証した謙譲語について簡単に纏めておく。一般的な謙譲語として生産性のある「お／ご～する、申し上げる」という例は省いたため、主な語彙項目の統語範疇は一人称代名詞と本動詞に集中する結果となった。一覧にすると、次のようである。

- (3) 〈人称代名詞〉 わたくし、わたし、手前（ども）、身共、拙者、愚僧、やつがれ、それがし
- 〈一般名詞〉 恐悦 厄介
- 〈定型句〉 率爾ながら
- 〈本動詞〉 申す、よばれる、頂戴する、戴く、差し上げる、まいる、承る、畏まる、控える、まかり出る、参じる、仕る、心得る、拝見する、拝察する、存ずる

このように語彙項目の数は、尊敬語と比べてもかなり少ないと言える。原因としては、噺の場面で謙讓語を用いるような状況が限られるということが考えられる。典型的には、商家でお客様の応対をする商人などを思い浮かべるが、そのような状況でも商人はお客様に対して尊敬語と謙讓語を交えて話すであろう。

これら語彙項目全般について指摘できるのは、大半が現代の標準的な日本語と共通しているという点である。例外は、「身共、拙者、やつがれ、それがし、率爾ながら」は余りにも古風、または侍言葉そのもので現代では通用しないであろうという点と、「よばれる」というのが上方に特有の言い方であるという点である。これ以外の語は、現代の標準的な日本語としても現用と言えるであろう。これは、尊大語とも共通する特徴である。尊大語も侍言葉が占める比重が大きい故に、上方言葉だけに見られる例は少ない。噺『佐々木裁き』の東西版で比較すると、奉行の言葉遣いというのは江戸も上方も同様である。同じ土地に住んでいながら、町人が話す言葉と侍言葉は全く別物であったと言えよう。従って、尊敬語と卑罵語における町人言葉は第二章で取り上げた方言の「西高東低」説のように地域差が大きいと言える。

尊敬語にあった接頭辞の「お、ご～する、申す」などは本稿では独立して扱わなかった。複合語で「お／ご～する」という謙讓語形式があるが、そもそもこの形式での言い方が噺には少ない。『立ち切れ線香』で番頭が若旦那に「おもらい申します」と申し渡す場面が唯一の例と言える。それ以外としても、噺『壺算』で、瀬戸物屋が「もうお値段のほうもうんとお安う、せいぜい勉強いたしまして、どーんと働きましたところが、三円五十銭が一文もまかりまへんので」というような例で「勉強いたします」が見られる程度である（『米朝全集』第五巻）。

また卑罵語と比較しても、統語範疇の種類や語彙項目の数が圧倒的に少ない。一つには、上述したように卑罵語を用いる場面が多いのに対して謙讓語を使うような状況が少ないという事情が挙げられるであろう。もう一つ、大状況として日本語全体に謙讓語というのは統語範疇や語彙項目が限られるのではないかと考えられる。日常会話など全般を考えてみても、どうしても相手を主語に持ってくるが多くなるであろう。自分のことばかり喋るというのも、不遜に思える。そういうところから、尊敬語が発達する領域が相対的に謙讓語より大きくなる、というような仮説が立てられそうである。但し、これの検証には厳密な言語学的注意を要するであろう。また、尊敬語では「ご尊顔、御仁」というように普通名詞の例を挙げることができるが、これに対応するような謙讓語の語彙項目は見られないであろう。「愚息、愚妻、陋屋」のような親族名称あるいは特殊な名詞の部類に限られるであろう。

## 参考文献

- 浅田秀子（2001）『敬語で解く日本の平等・不平等』東京：講談社。  
井上史雄（編、2017）『敬語は変わる 大規模調査からわかる百年の動き』東京：大修館。  
井上史雄・遣水兼貴（2017）『『敬語の指針』に見る現代敬語の性格変化』井上（2017）所収。  
桂枝雀（1995、1996）『桂枝雀爆笑コレクション』全五巻、東京：筑摩書房。  
桂文我（2002）『続 復活珍品上方落語選集』大阪：燃焼社。  
桂文我（2014）『伊勢参宮神賑』東京：青蛙房。  
桂米朝（2002、2003）『上方落語 桂米朝コレクション』全八集。東京：筑摩書房。  
桂米朝（2013、2014）『米朝落語全集』全八巻、増補改訂版。大阪：創元社。  
角岡賢一（2017a）「上方落語に見られる軽蔑語の実例」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第26

卷。pp.95-114。

角岡賢一（2017b）「上方落語に残るお茶屋文化」『京都産業学研究』第十五号。pp.125-142。

角岡賢一（2019）「日本語尊大表現の語用論的分析」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第28巻。  
pp.3-22。

角岡賢一（2020）「待遇表現としての尊大語と卑罵語」米倉、他（編）所収。

菊地康人（1997）『敬語』東京：講談社。

旭堂南陵（2019）『事典にない大阪弁』増補改訂版。大阪：浪速社。

真田信治（監修、2018）『関西弁事典』東京：ひつじ書房。

釈徹宗（2010）『おてらくご 落語の中の浄土真宗』京都：本願寺出版社。

釈徹宗（2017）『落語に花咲く仏教』東京：朝日新聞出版。

関山和夫（1990）『安楽庵策伝和尚の生涯』京都：法蔵館。

関山和夫（2001）『庶民芸能と仏教』東京：大蔵出版。

高島幸次（2018）『上方落語史観』大阪：一四〇B。

田辺聖子（1985）『大阪弁おもしろ草子』東京：講談社。

東大落語会（編、1994）『増補 落語事典』改訂版。東京：青蛙房。

竹田晃子（2017）「卑罵語と敬語の発達」井上（2017）所収。

前川佳子（2016）『船場大阪を語りつく』大阪：和泉書院。

前田勇（1966）『上方落語の歴史』改訂増補版。大阪：杉本書店。

牧村史陽（1984）『大阪ことば事典』東京：講談社。

米倉よう子、山本修、浅井良策（編、2020）『ことばから心へ 認知の深淵』東京：開拓社。